

著作の執筆と出版こぼれ話（その五）

所 功（81歳）

E 日本文化関係の解説

- 31 『伊勢の神宮』（新人物往来社、A5判 162頁）昭和48年（1973）10月（32歳）→『伊勢神宮』（講談社、文庫判 234頁）平成5年（1993）4月（51歳）
- 32 『伊勢神宮と日本文化』（勉誠出版、B6判 220頁）平成26年（2014）4月（72歳）

伊勢の神宮は、日本で最高の格別な神社（本宗）として「神宮」を正称とする。その神宮で飛鳥時代から20年ごとに行われてきた「式年遷宮」の第60回正遷宮が、昭和48年（1973）10月に行われた。その7年前（同41年）から皇學館大学の専任教員であった私は、数年にわたる準備の諸祭儀を拝見していた。

その夏休み直前、新人物往来社のI編集長が突然来学され「神宮とは何か、誰にも判り易い本を書いてほしい」と頼まれた。神道は専門外であり単なる門前の小僧にすぎないが、4年前に結婚した妻（京子）の恩師でもある高取正男京都女子大学教授（宗教民俗学）の推薦といわれ、ありがたく引き受けた。

そこで、夏休みから秋口まで懸命に執筆した。それに神宮広報課にいた篠原龍氏（皇大卒業生）などの撮影した貴重な写真を多数（カラー22葉、モノクロ56葉）を加え、徳川宗敬大宮司揮毫の題字を掲げ、12月の誕生日に出版したのが31である。本書は意外に好評をえて、20年後（平成5年）、講談社学術文庫に加えられ、現在30版を越えている。

この31の初版本は、昭和48年12月下旬、有志学生を伴って皇居勤労奉仕に上った際、目賀田八郎東宮侍従を通じて伝献したところ、皇太子・同妃（現上皇・上皇后）および当時13歳（学習院中等科）の浩宮様の台覧に供された、とのお電話を頂いた。また、文庫本は、平成5年10月2日、内宮遷御の儀を一緒に奉拝したD・キーン博士（コロンビア大学名誉教授、71歳）に差し上げたが、その遷御直後、NHK名古屋の企画により、同氏と岩城宏之氏（庭燎奉仕者、61歳）と私の三人で感想を語り合った。

ついで平成13年（2001）から伊勢神宮崇敬会の評議員を委嘱されて各地へ講演に廻り、同15年には73『神宮・皇室と日本人』（A5判 66頁）などを著した。また、その前後十数年間に、いろいろな雑誌類から頼まれて書いたり、新たに見出した史資料を使った論考が10本になったので、平成25年（2013）10月の第62回正遷宮に関する覚書を含めて纏めたのが32である。

このうち「日本の聖地——古くて新しい伊勢の神宮——」（和英両文）は、平成11年（1999）5月、ワシントンで開催された「世界の歴史的な都市と宗教的な聖地に関する国際シンポジウム」で、京都フォーラム（矢崎勝彦理事長、57歳）の推薦により初めて渡米し行った基調報告である。

なお、79『お伊勢さんの式年遷宮と廣池千九郎』（A5判 62頁）には、明治42年（1909）3月、同年10月の正遷宮に先立って、神宮皇學館教授の廣池千九郎博士（42歳）が『伊勢の神宮』（早稲田大学出版部）を著わされており、その経緯と意義を論じた。

また、78『「おかげまいり」と「せぎよう」』（A5判 68頁）は、稲盛和夫氏に師事す

る「盛和塾」大阪の研究会で話した記録である。

90『日吉大社大年表』（同編集委員会、B5判220頁）平成30年（2018）11月（76歳）

日吉大社（大阪市坂本）の現宮司は、皇學館大学国史学科十期生の馬淵直樹氏である。そのクラス担任をして以来の縁により、社史の基礎となる年表（旧版の全面増訂）を監修するよう依頼された。しかし、専門外のことであるから、嵯峨井建氏（京都國學院講師）と久禮旦雄氏（京都産業大学准教授）に全面的な協力を求め、巻頭論考「日吉大社の歴史に見る日本文化の特性」を寄せたにすぎない。

なお、神社史に関与したのは二回（ともに田中卓博士の監修指導）。ひとつは大阪市の『住吉大社史』（上中下三巻）下巻（昭和58年）に奈良・平安時代を分担執筆した。もうひとつは一宮市の『真清田神社史』（通史篇・資料篇、平成7年）に、奈良・平安時代と明治以降を分担執筆した。

さらに、神社新報社が創刊50年記念事業として「現代神道研究集成」の企画を立て、編集委員を委嘱された私は、神社界以外の研究者として意見を述べた。その全10巻（他に牟禮仁氏作成の別巻索引）は、平成10年（1998）から2年間で完成され、その中に拙稿「平安神宮創建前史」なども収録されている。

18『日本の祝祭日』（PHP研究所、新書判260頁）昭和61年（1986）3月（44歳）→『「国民の祝日」の由来がわかる小事典』（同所、新書判274頁）平成15年（2003）8月（61歳）

21『京都の三大祭』（角川書店、選書四六判296頁）平成8年（1996）1月（54歳）→新訂版（角川ソフィア文庫308頁）同26年（2014）6月（72歳）

昭和56年（1981）4月から京都産業大学へ赴任した私は、教養部で「日本の年中行事」と題する新設科目を担当し、3年後に法学部へ移ってから定年退職まで続けた。そこで毎年「国民の祝日」と「京都の三大祭」をとりあげ、その講義ノートを基にして書きあげたのが18と21である。

まず18では、古代以来の年中行事を承けて明治以降に整えられた皇室中心の国家的な祝日と祭日が、戦後GHQの指令により、昭和23年（1948）「国民の祝日に関する法律」で全面的に改変された経緯を概説したあと、現行の「祝日」について詳述した。その内実は、天皇や神道に関係の深い日が多く、また「こどもの日」も「母に感謝する」日と明示されていることなどを指摘した。

なお、77『「国民の祝日」の来歴検証と国際比較』（国民会館叢書、A5判88頁）では、とくに「建国記念の日」が旧紀元節を改称復活された経緯、および世界各国の「独立記念日」「革命記念日」との本質的な異同などについて論じた。

また21では、5月の「賀茂祭」、7月の「祇園祭」、10月の「時代祭」が、各々単なる行列ショーではなく、賀茂大社・八坂神社・平安神宮の各大祭に伴う見物可能な祭礼行事であるから、この三社の祭神と来歴などについても実証的に説明した。そのせいか、選書でも好評をえて、のち文庫化され今も版を重ねている。

59『靖国の祈り遙かに』（神社新報社、新書判215頁）平成14年（2002）7月（60歳）

靖国神社は、明治2年(1869)創立の「東京招魂社」が10年後に別格官幣社の「靖国神社」と改称された。ここには、「国事殉難者」として幕末の松陰たちから、大東亜(太平洋)戦争で戦死した264万7千余柱の英霊が、平等に「靖国大神」として祀られる。

その一柱が私の父・所久雄(1912~1943)である。父は結婚して四年後に赤紙召集され、翌年(昭和18年7月27日)南洋のソロモン群島ニュージョージア島で戦死している。当時1歳半余の私は、昭和30年(1955)に初めて靖国参拝して以来、父の歩みや思いを知ること努めた。とくに、同47年(1972)7月に激戦地を訪ねて、奇しくも「所」と刻んだ父の飯盒などに巡り会うことができた。

この体験は、私の人生観を一変させ、祖先・英霊の遺志に応えるため、靖国問題にも関心を深め、平成12年(2000)から靖国神社崇敬者総代も引き受け、まもなく関係論考を纏めたものが本書59である。

また、多くの人々に判り易い「公式ガイドブック」として89『ようこそ靖国神社へ』(新訂版、A5判108頁)の編著を依頼され、大半の写真に簡潔な解説を加えた。

なお、75『戦没者の慰霊と遺骨収集』(A5判54頁)は、平成16年(2004)の1月にソロモン諸島ニュージョージア島を遺児仲間たちと慰霊のために再訪し、また2月に友人の坂本大生氏(伊勢青々塾出身)が十数年前から続けている「沖縄遺骨収集シルバーボランティア」に初めて参加した時の体験と今後の課題について講述した記録である。

60『歴史に学ぶ』(新人物往来社、A5判326頁)平成3年(1991)12月(50歳)→『日本歴史再考』(講談社、学術文庫判312頁)同10年(1998)3月(56歳)

61『あの道この径100話』(モラロジー研究所出版部、B5判238頁)平成16年(2004)12月(63歳)

62『古希随想』(歴研、A5判112頁)平成24年(2012)3月(70歳)

63『日本学広場88話』(コミニケ出版、A5判240頁)令和2年(2020)5月(78歳)

前述の諸書は、研究成果の論考や講演記録などを集成したものであるが、それらより平明に書いた随想・評論などを集成して、人生の節目ごとに出版したのが、60・61・62・63である。

まず60の初版には、満50歳を迎える機会に歴史関係の講演記録を纏めた。それが7年後、講談社学術文庫の9・10と31を担当されたN氏の勧めにより、同文庫へ入れられた。

ついで61は、『産経新聞』大阪本社の藤原義則編集委員から、平成14年度と15年度、夕刊(西日本版)に毎週一回のコラムを依頼され、100回近く書いたエッセイを集成し、3年遅れの還暦記念に出したものである。

つぎに62は、友人の吉成勇氏が編集主幹(もと新人物往来社編集長)を務めていた月刊『歴史研究』に九回連載した自伝的なエッセイなどに詳細な「著作目録」を加え、古希と京都産業大学定年退職を記念して出したものである。

さらに62は、七十歳代に入ってから執筆した三種類①②③のエッセイなどを集成した。①は私と仲間のホームページに随時(長短自在)掲載したもの。②は大阪のコミニケ出版から依頼されて、『月刊朝礼』の新設欄「日本学広場」(2頁分)に5年間連載したもの。③は『歴史研究』の巻頭言「いま伝えたいこと」を一任されてトレンドィーな話

題（毎回1頁分）を書いた二年分である。

このうち④のホームページは、平成25年（2013）春、従弟の橋本秀雄（大垣市在住、現在、岐阜県教育懇話会会長）と相談して立ち上げ、共通の恩師（稲川誠一先生）門下有志で作る「汗青会」（歴史研究会）にちなんで「かんせい PLAZA」と名付けた（私のHP//tokoroisao.jpでも開ける）。まもなくモラロジー研究所の橋本富太郎氏と京都産業大学の久禮旦雄氏にも参画してもらい、拙稿のデータ化には日本学協会研究員の野木邦夫氏と京都モラロジーの岩田享氏にも協力をえている。

また⑤の『歴史研究』は、前述の吉成勇氏が歴史愛好を「道楽」と称して在野歴史ファンのために続けてきたが、令和3年（2021）3月、80歳で他界されて以降、編集発行は戎光祥出版に受け継がれたが、吉成氏の遺言により現在も巻頭言をボランティアで書いている。

なお、④とは別に、橋本富太郎氏が担当するモラロジー道德科学研究所のHP「ミカド文庫」には毎月、および久禮旦雄氏が担当する京都宮廷文化研究所のHPにコラム「宮廷文化歴訪」を随時寄稿している。

66『名画に見る国史の歩み』（近代出版社、大判110頁）平成12年（2000）4月（68歳）

71『日本の自然と歴史の特性』（熱田神宮、B5冊子60頁）平成4年（1992）

72『「家族同姓」の再評価』（神社本庁、A5冊子72頁）平成9年（1997）

74『日本の建国と発展の原動力』（モラロジー研究所、A5冊子65頁）平成16年（2004）

76『「ハタ」の来歴と日本文化の特色』（真清田神社、A5冊子68頁）平成21年（2009）

80『皇室に学ぶ日本人の原動力』（皇學館高校、A5判冊子48頁）平成27年（2015）

このうち66以外は、平成に入ってからからの講演記録であり、既刊書未収の広義の日本文化関係分である（70・73・75・77・78・79・81などは、別の関係部分で言及済み）。

まず66は、昭和8年（1933）12月、皇太子明仁親王（現上皇）の御誕生記念事業として東京（広尾）に「国史絵画館」の建設が計画され、約10年かけて当代の代表的な画家により、神代から現代までの名場面が描かれた。それが戦後中止となり、絵画は伊勢神宮の徴古館へ収納されている。その全図のカラー写真に数名の協力をえて解説を加え、監修を小堀桂一郎氏（小堀鞆音画伯孫、66歳）に依頼した。

ついで71『日本の自然と歴史の特性』は熱田神宮の文化講座、また72『「家族同姓」の再評価』は神社本庁の氏子総代研修会、および76『「ハタ」の来歴と日本文化の特性』は、真清田神社桃花祭東車維持財団講演会における各記録冊子である。

さらに80『皇室に学ぶ日本人の原動力』は皇學館高校開学50周年記念の特別講演会に招かれ、当校で昭和39・40年（1964・65）年度に当校で非常勤講師（社会科）を務めて以来の縁により「皇学」（皇室を中心とする学問）のもつ文化史的意義を講述したものである。

92『えにしのふしぎ』（A4判28頁）平成5年（1993）7月（51歳）

93『母を偲ぶ』（A4判22頁）平成19年（2007）7月（55歳）

94『野中の歩みと社寺の営み』（A4判36頁）平成24年（2012）3月（70歳）

95『わが八十年の歩み』（A5判112頁）令和3年（2021）12月（80歳）

この四点は手作りの私家版であるが、個人的にはいずれも大事な意味をもっている。まず92には、父（所久雄）が昭和18年（1943）7月27日に南洋ソロモンのニュージョージア島において満30歳で戦死してから50年祭を迎えた機会に、母の手記「亡父の思い出」と私の所感などを集成した。

つぎに93は、母が平成19年（2007）7月10日に満91歳寸前で他界した際、私の記した「母の最期」など数篇と参考随筆などを集成したものである。その三年前には、母が折々に詠んだ短歌と俳句を選び『米寿雑詠抄』（和装本二冊、妻京子が清書）を作った。

ついで94は、平成24年（2012）3月、満70歳で小田原へ移り住むにあたり、生まれ育った郷里の（揖斐川町小島）野中地区の歴史、および「野中神社」と「善徳寺」で営んできた年中行事などを平易に纏め（付、若山家近世文書）、隣家の草野靖彦氏に入力してもらい、全65戸に差し上げた。

さらに95は、令和3年（2021）12月、満80歳を迎えるにあたり、これまでの歩みを(1)修学期、(2)研鑽期、(3)活動期、(4)奉仕期に分け、随所に補注を加えたものである。その後の分は(5)終活期として加筆を続け、ホームページに掲載している。

〈追記〉自分の著作ではないが、終生の恩師と仰ぐ稲川誠一先生と田中卓先生が他界されてから、同門の有志と協力して追悼文集・遺稿文集を作らせて頂いたことがある。

まず稲川先生は、昭和60年（1985）3月20日、激務の最中に59歳で急逝された。そこで直ちに関係者・教え子たち手書きの汗青会編『稲川誠一先生を偲ぶ』を作り、それから1年かけて、汗青会の田辺裕氏・橋本秀雄氏・廣瀬重見氏など数名の尽力より、先生の研究論文・教育評論などを集成した『日本の歴史と教育』二冊「歴史篇」（A5判614頁）「教育篇」（A5判556頁）および本格的な追悼文集『照汗青』（A5判349頁）を刊行した。

ついで田中先生は、平成30年（2018）11月24日、満95歳手前で他界された。そこで、同門の清水潔氏たちと相談し、100日祭までに『田中卓先生を偲ぶ』（B5判212頁、野木邦夫氏が全文入力）を作成した。ついで今年の11月24日に5年祭、12月12日に生誕100年を迎える機会に、『日本教師会田中卓会長の足跡——『日本の教育』関係記事抄録——』（A4判70頁）を手作りして、その「あとがき」に「田中卓先生の懸命な活動に学ぶ」を書き加えた。その入力と編集にも野木邦夫氏と橋本秀雄氏の協力をえて、近く自費出版する。

（かんせいP L A Z A 令和5年8月15日）